

2006 年

日本都市計画学会
学会賞・功績賞・国際交流賞受賞者
ならびに受賞理由書

(社) 日本都市計画学会

日本都市計画学会

2006年 学会賞・功績賞・国際交流賞受賞者

ならびに受賞理由書 目次

1. 学 会 賞.....	pp.1-10
① 受賞者一覧.....	p.1
② 選考経過および各賞の対象内容.....	p.2
③ 受賞理由	
1. 石川奨励賞.....	p.3
2. 論文賞.....	p.4
3. 論文奨励賞.....	pp.5-10
2. 功 績 賞 ・ 国 際 交 流 賞.....	p.11-17
① 受賞者一覧.....	p.11
② 選考経過および各賞の対象内容.....	p.12
③ 受賞理由	
1. 功績賞.....	p.13
2. 国際交流賞.....	p.16

2006年 日本都市計画学会賞 選考経過

2006年（2005年度対象）学会賞は、会員からの推薦並びに学術委員会が推薦した石川賞候補2件、論文賞候補5件、論文奨励賞候補24件、計画設計賞候補1件、計32件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全19名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が各々独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された書面での評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、受賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、石川奨励賞1件、論文賞1件、論文奨励賞12件の受賞が決定した。なお、計画設計奨励賞は推薦がなかった。

各賞の対象内容

石川奨励賞

都市計画の進歩に寄与し、将来の発展性が期待される個人または団体を対象とする。

論文賞

過去1年以内に発表された都市計画に関する学術研究論文で、一定のまとまりがあり、都市計画の進歩・発展に顕著な貢献をした会員または会員が推薦する個人を対象とする。

論文奨励賞

過去1年以内に発表された論文において、都市計画の進歩に寄与し将来の発展性が期待される会員または会員が推薦する個人を対象とする。

石川奨励賞

受賞者 秦 辰也

題目 タイ都市スラムの参加型まちづくり研究：こどもと住民による持続可能な居住環境改善策

受賞者の秦氏は、1980年代半ばから現在まで約20年間の長きにわたり、(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA)の一員として、バンコクのクロントイ地区を始めタイの各都市のスラム地区において、コミュニティ構成員に実際にコミットしながら住民参加型居住環境改善運動の発展に寄与してきた。秦氏が活動してきた20年間は、タイの経済成長と軌を一にしており、スラム問題に代表される都市環境問題が続出した時期に該当する。スラム政策についても、スラムクリアランス一辺倒の時代から、上からの低所得者への社会住宅保障政策(インフラ整備)、さらには土地利用権容認と住民参加による内発的な居住環境改善事業まで、大きく転回してきた時期にあたる。こうした流れの中で、非営利組織の一員として現場の最前線に身をおいて活動してきた秦氏の活動は、タイ国内のスラム政策の展開に大きく寄与してきた。一般論に終始するスラム地区施策の実務家や都市スラム研究者が多い中で、タイの文化的背景をも現場生活の中で十分に体得しながら進められてきた秦氏の活動は特筆される。同時に、論文・シンポジウム発表などを通じてアジア都市全般のスラム地区環境改善方策にも多くの示唆を提供してきた。近年は参加型居住環境改善事業におけるこどもの役割について精力的な現場活動・研究を続行しており、参加型居住環境改善分野における氏の今後のさらなる活躍が期待される。

論文賞

受賞者 布野 修司

題目 近代世界システムと植民都市

受賞論文「近代世界システムと植民都市」(京都大学学術出版会)は、17、18世紀のオランダ植民都市の分析から、近代世界の形成過程の解明という歴史的課題、ならびに、植民都市の空間形成と変容に関わる都市計画的課題にアプローチすることで独創的な論の展開に成功している。植民都市に関する既往研究は少なくないが、本著はそれらと比較しても個性ある力作である。収められた興味ある知見の数々は、膨大な調査研究を周到に企画し、系統的に実行し、そして有益な形にまとめあげた統合の成果に他ならず、これに果たした受賞者の功績が高く評価された。

産業革命後の都市化社会の進展に着目して世界システムを探る作業がたくさんなされてきた反面、大航海時代の世界システムを全体的に探ることはあまりなされてこなかった。この研究は、世界の都市を複眼で、しかもパースペクティブに捉えたい人にいくつものヒントを与えてくれるであろう。調査内容の豊富さ、実証性に裏打ちされた研究としての独創性、そして成果の完成度のいずれにおいても価値が十分認められ、本論文の著者に日本都市計画学会賞を授与することが妥当と判断した。

論文奨励賞

受賞者 猪井 博登

題目 福祉の向上の視点を組み込んだコミュニティバスの評価に関する研究

本論文は、少子高齢化の進行によってコミュニティの足（輸送）の対応としてコミュニティバスを対象として、課題となっている「利用しやすさ」「福祉対応になっているか」「発展性はあるか」などが研究テーマになっている。

福祉の向上をテーマにケーススタディし、導入地区の指摘、中山間地域での可能性、コミュニティの多様なニーズへの対応など汎用化とともに事業採算面の工夫など、効率性の対応も含めて、その有用性を検討したことという点で、論文奨励賞に値すると判断する。

受賞者 小林 隆

題目 市民参加による計画プロセスの電子メディア化に関する研究

本論文は、神奈川県大和市を舞台に、自治体の政策決定過程における市民参加を電子メディアで行うことの可能性と課題を検証したものである。

「電子メール」、「電子会議室」及び「ICカード」の3段階の社会実験を実施し、各段階ごとに電子メディアによる市民参加の傾向、限界、課題を克明に分析している。その結果、電子メールではアクセス率は高いがレスポンスは少ないこと、電子会議室は発言者の固定化が顕著であること等の有益な知見を得た。

都市計画の政策決定への市民参加に電子メディアを有効に活用することに対する期待は、行政現場で極めて高いものがあり、本研究の意義は大きいと考える。とりわけ、筆者が行政職員としての実践活動を研究に昇華させたという点で、称揚に値すると判断する。

受賞者 坂井 文

題目 **Open Spaces and the Modern Metropolis: Evolution and Preservation in London and Tokyo**

本論文は、ロンドンと東京を対象にして、19世紀から20世紀にかけて、近代以前の伝統的な都市のオープンスペースが、近代都市形成の過程でどのように保全或いは消滅していったかを、ハーバーマスのいう公共圏を形作る社会集団、公共サービスを受ける集団に着目して解明した、都市のオープンスペース形成に関する比較研究論文である。歴史や制度の異なる二つの国の都市の比較を、ハーバーマスの公共哲学に基づいて体系的に展開することは至難の事業であり、審査の過程で、この点、危うさも指摘された。しかしながら、

本論文は、両国の広範にして多様な一次資料(国会議事録、政府関係資料、新聞、社会活動グループの活動記録、図面、地図等)を逐一丹念に収集している点。それに基づいて、ロンドンの上層階級の共用庭園であったスクウェアが、ミース卿等の公園運動家の尽力によって、消滅することなく、近代都市のオープンスペースとして位置づけられ、保全されることになった経緯を精緻に実証している点において特に優れており、これまでの都市公園形成史の空白を埋める貢献となっている。また、はしがきの書き出しの文章に見られるように、全体が格調の高い英文で執筆されており、日本の若い研究者の学術活動の国際的な広がりを予感させるものとなっている。以上の点で、本論文は日本都市計画学会論文奨励賞に値すると判断した。

受賞者 三古 展弘

題目 多時点断面データと SP データを用いた交通行動変化の非集計分析

本論文は、交通行動の変化に関して非集計モデルを用いて分析した論文である。一つ目の多時点断面データを用いた分析は、中京都市圏の過去 30 年間のパーソントリップ調査データを用いて、交通手段選択を中心に、自動車保有の選択や居住地の選択との関係を含めて分析し、交通行動に影響を与える要因の経時変化を明らかにした力作である。二つ目の SP データを用いた分析は、データ種類とモデルタイプの組み合わせを比較検討し、行動変化意向の表現には非補償型のモデルや SP データを使用したモデルが優れていること、選好無差別情報を含む SP データ、特にダブルバウンド形式の SP データを使用する場合のほうが推定精度のよいモデルが得られること、等を明らかにしている。いずれの分析も、目的に応じた分析手法の工夫が見られるだけでなく、交通需要予測手法の改善につながる有用な知見を与えており、論文の完成度も高く、論文奨励賞に値するものと評価した。

受賞者 徐 蘇斌

題目 中国における都市・建築の近代化と日本

これは、20 世紀初頭から第 2 次大戦後の建国期にかけての中国の都市および建築分野の近代化の実態と意味を、日本との関係に着目しながら考察した論文である。著者は、近代化過程における中国の外国からの技術や知の受容には、植民地化と結びついた「従属的受容」とナショナリズムとも結びついた積極的な「主体的受容」の 2 つの側面があるという認識に立ち、従来あまり論じられることのなかった後者の側面に焦点をあて、日本を媒介とした西洋技術の受容の実態とその意味を明らかにして、新たな独創性のある知見を得ることに成功している。その内容は、比較して日本の近代化を考える上でも有益な示唆をあ

たえる。また、既往研究を見極めた上で、確実な資料と文献に基づいて、緻密かつ論理的に論が展開されており、論文構成の点からも完成度が高い。全体として優れた論文であり、論文奨励賞に値する。

受賞者 白井 芳樹

題目 昭和初期の富山都市圏における土木事業と三人の土木技師

本論文は、昭和初期に富山都市圏で実施された土木事業（治水、交通、都市計画）で街づくりに大きな影響を及ぼした事業の計画過程、事業経過、そして事業を担った土木技術者の人物像と果たした役割について研究したものである。神通川の改修事業、富山大橋の改築、都市計画運河・街路・土地区画整理事業などについて、丹念に一次資料にあたり、相互関連性などの分析を通じて、これらの事業が密接に絡んで実施されたことを紹介している。

膨大な資料に丁寧にあたった努力はもちろんのこと、異なる分野の事業が相互に影響し合いながら実施されてきた課程を詳らかにしていること、そして、多くの土木事業に携わる人間が歴史的には匿名性を持っているのに対して、ここでは事業において果たした人物についても、クローズアップしている点は、土木史研究の中で貴重な分析事例となっている。また最終的には都市という広がりの中で都市計画的総合性を持って実施されたという統合化による分析も貴重な視点を提供するものである。

以上の評価を総合すると、本論文は論文奨励賞に値するものと判断される。

受賞者 菅 正史

題目 都市計画の分散化とサステイナブル都市政策に関する一連の研究

この研究は、都市計画をその調整過程に着目し、事前調整に基づく「統合型都市計画」と施策の実現段階の調整に基づく「分散型都市計画」に区分して、最近の都市計画が分散型都市計画を徴用している状況を分析している。また、その分析過程において、海外の多くの制度的事例を取り上げ整理し、日本の都市計画制度における白地地域の開発規制、都心部における都市開発諸制度を取り上げて、分散型都市計画の果たす機能や意義付けについて分析をしたものである。欧米におけるサステイナブル都市政策に関する文献調査や国内の事例研究も充実している。したがってこの研究は、転換期にある現在の都市計画へ興味ある示唆を与えるものであり、細部における厳密性や具体性には問題が残っているが奨励賞として評価できる。

受賞者 周藤 利一

題目 韓国の都市計画・住宅法制度の政策展開に関する研究

本論文は、朝鮮総督府時代から現代までの韓国における都市計画・住宅法制度について歴史的な展開を踏まえた形で、現状を総括的に分析・考察した研究である。以下の理由により本論文はすぐれた研究として論文奨励賞に値すると推薦します。

1. 従来、わが国では韓国の都市計画制度や住宅制度や特定のテーマ、都市の事情について報告、研究発表されることが多かったが、本研究は韓国におけるオリジナルな資料に基づき、体系的・網羅的に韓国の都市計画制度・住宅制度を歴史的分析に基づき明らかにした点が高く評価できる。

2. 特に、1990年代以降、韓国では独自の制度展開の動きを示している点を解明したこと、また、韓国のグリーンベルト政策の背景、住宅管理制度の実態を解明した点はオリジナルな貢献として評価できる。

制度運用がどのようになっているのか、制度と実態の一致、乖離の点など、日韓との比較について、今後研究すべき点が多いと思われるが、これらについても今後の展開が期待できる。以上の点から、本論文は論文奨励賞に値すると考えられる。

受賞者 田中 健一

題目 連続平面ならびにネットワーク空間における通過量の基礎理論と都市分析への応用

本論文は、都市内トリップの起・終点分布を所与として、各地点における方向別断面交通量の時間的な変化に関する理論的な検討を、連続平面とネットワーク空間を対象として行ったものである。

時間に依存した断面交通量の分布に関して、積分幾何学等の理論を駆使し、直線距離、放射・環状距離、直交距離、ネットワーク距離等に基づく断面交通量の時空間分布の導出に成功している。特に、問題の本質を失うことなく、交通現象を貫く巨視的な構造を解析的な理論展開によって明らかにした点は特筆に値し、都市形態と交通流分布の関係を理論的に突き詰めた非常にレベルの高い論文である。

このモデルによって、時間につれて変化する都市内の方向別の交通量を明らかにすることが可能となり、時間軸を活用することによって都市が抱える問題を解決することの有効性を検証することが可能となるであろうことなど、都市整備の基礎理論を提供している。

また、論文も大変読みやすく、論旨の展開を十分に練って執筆されたものであると評価できる。論文奨励賞としてふさわしい成果である。

受賞者 藤井 さやか

題目 マンション紛争の構造と既成市街地更新コントロール手法に関する研究

本論文は、近年大きな問題となっているマンション紛争に対して、まず、既成住宅地内でマンション紛争が発生する都市計画の制度運用上の問題を明らかにした上で、開発コントロールの課題を整理し、その上でこれらの課題に対応した手法の方向性を提示しようというものである。それぞれ前提となる枠組がきちんと提示された上で、丹念な事例調査によって、問題点を洗い出し、手法のあり方を多面的に検討している。

これらの分析から得られた知見を踏まえ、方式と主体に着目して、地域の合意形成状況に応じた地区基準を導入する一方で、より充実した開発協議によるコントロールを行い、その連携を図るという既成市街地更新コントロールの方向性を提示している。本研究の到達点は、実際に多発するマンション紛争に対して取り組む有益な視点を与えており、論文奨励賞にふさわしいものと評価される。今後、開発協議システムをより具体的に示す研究の展開にも期待したい。

受賞者 松川 寿也

題目 農村地域における土地利用制度とその包括的運用に関する基礎的研究

本論文は、農村地域での土地利用コントロールの主導権を握る農振制度を主たる対象として、都市計画区域マスタープランにおける白地の土地利用方針や開発許可制度といった都市計画法制度との関連を、運用面も含めて極めて詳細に分析し、適正な包括的土地利用制度の構築に向けての制度論・計画論を提案したものである。地方都市周縁部の農村地域は、都市計画的対応が模索されながらも、これまで農村地域の土地利用規制を都市計画の観点から本格的に研究した論文は極めて少なく、オリジナリティが高いこと、緻密な実証分析に基づき、都市計画法側と農振法側からの双方の論点を踏まえた上で、農村地域での土地利用コントロールという喫緊の課題に対して、時期を得た有用な提案がなされていること、などが優れた点と評価され、論文奨励賞に値すると判断された。今後は、農村的土地利用の背景にあり、土地利用を考える上でより根幹的な問題である後継者や農業の生産性といった産業としての農業の問題にまで踏み込んだ研究の発展を期待したい。

受賞者 松原 康介

題目 近代都市計画の導入に伴う都市空間の形成と変容から見た歴史都市フェスの都市
保全

この研究は、歴史的都市フェスの都市構造について、詳細な文献調査及び現地居住により明らかにし、これを踏まえて、歴史的・文化的都市遺産の保全と持続的維持に向けた都市政策、都市整備の在り方を考察したものである。

北アフリカ、モロッコの都市フェスの起源は、8世紀にさかのぼり、爾来1000年以上の歴史を有する。本論文は、フェスの都市構造を、旧市街地、フランス保護領下時代に建設された新市街地、その後の CIAM 構想に基づく郊外地の三つに大別し、その重層化がフェスの特性であるという視点から、フィールドワークによりフズ（歴史的な公的施設の維持・管理システム）による複合文化空間の形成など、フェスの都市マネジメントに関わる基本的要件を明らかにした。歴史的都市の文化の重層性を、都市計画に如何に生かしていくかについて、スケールの大きい、かつ緻密な論文であり、高く評価できる。

2006年 日本都市計画学会

功績賞・国際交流賞 選考経過

2006年日本都市計画学会功績賞・国際交流賞は、理事会のもとに設置された表彰委員会（特別功労表彰選考分科会）が、理事・評議員から候補者の推薦を受け、その中から選考分科会で慎重に検討した結果、功績賞3名、国際交流賞2名を選考し、理事会に推挙した。なお、国際交流賞の授与は、年内に別途機会をみて表彰するものとする。

なお、各賞の対象の種類は以下の通りである。

各賞の対象内容

功績賞

長年にわたって日本都市計画学会の発展、ならびに都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者で、その貢献が、社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

国際交流賞

長年にわたって日本都市計画学会の発展、ならびに都市計画の国際的交流などに貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

功績賞受賞理由

石丸 紀興

石丸紀興氏は、昭和 41 年 4 月以来、広島大学工学部・広島大学大学院工学研究科・広島国際大学において、教育・研究に邁進してこられ、また本会中国四国支部設立にあたり多大なる尽力をいただき、平成 14 年から平成 16 年まで支部長を勤められた。

具体的なお活動として第 1 に、住民参加方法を組み込んだまちづくり計画を昭和 40 年代中頃から実践された。当時、自治体によっては住民参加に道を開くことには根強い抵抗があったが、広島市周辺部のいくつかの地区を対象としたまちづくり計画において、住民参加方式を提案し、試行しながら実践した。当初必ずしも好意的でなかった行政当局も、時代の変遷とともに一定の理解を示し、部分的ではあるが、都市政策として認知されるようになった。

第 2 に、昭和 40～50 年代当時、瀬戸内海沿岸各地で公有水面埋立が大規模に進められつつあった時に、海岸線沿いに線状あるいは帯状に土地利用を見ることによって海岸線の実態把握が可能であることを示し、さらに現実の瀬戸内海沿岸の海岸線において、自然海岸の著しい減少、人工海岸の増大、海水浴場海岸の消滅・後退といった傾向をデータとして明らかにすることができ、埋立計画の進行によってはその傾向がさらに著しく進行することを示された。また、海岸線の意味については、埋立用地としての価値だけでなく、生態学的、さらに景観やレクリエーションとしての重要な役割、水質・空気等の浄化・悪化防止といった重要な機能等を有することを指摘し、一定の自然海岸の存在、保存が不可欠であることを提唱し、無造作な埋立を警告した。その後調査結果は一定の問題提起となり、環境庁の「緑の国勢調査」でも同様な海岸線分類のもとで調査がなされ、「瀬戸内海環境保全臨時措置法」制定施行へ繋がった。

第 3 に、昭和 50 年ごろから、広島市の戦災復興計画の関係者からの聞き取り調査を開始し、確認されていなかった計画思想や新たな事実・資料を明らかにした。聞き取り関係者は広島だけでなく全国各地に及び、当時健在であった復興計画関係者 100 名を超え、証言集として自費出版し、今では極めて貴重な聞き取りテープ資料となった。そういった中から、広島市史である「広島新史」において「都市文化編」として戦後復興過程を計画構想、計画し、事業遂行といった側面から記述した。同時に文化人類学的手法で戦後の市民生活の変遷を辿ることとなった。この成果は、広島では被爆 40 年を記念した図説「広島被爆 40 年始都市の復興」として結実し、さらに被爆 50 年史編集へと展開することとなった。

これらの卓越した功績により、日本都市計画学会・功績賞を授与するものである。

三輪 利英

三輪利英氏は、昭和 28 年に大阪市に奉職以来、交通局高速鉄道建設本部、総合計画局都市計画部長を経て都市再開発局長を歴任するなど、大阪市の都市計画行政に中心的な役割を果たし、とりわけ都市景観を重視した都市開発や都市基盤の計画や整備に取り組みました。

昭和 56 年には「都市景観評価システムに関する方法論的研究」で京都大学より博士号を授位された。その後、福山大学での研究においても都市開発と景観をテーマとするなど、「公共事業の景観面からの評価」の分野におけるパイオニアとして常に先進的な活動を行い、学識経験者として継続的に地域的な都市行政にも寄与された。

氏の業績として特筆されるべきは、大阪市の再開発行政に、都市景観を重視した事業計画を初めて取り入れ、魅力的なまちづくりの推進に貢献されたことである。

昭和 55 年度・56 年度には都市再開発局長として、大阪駅前市街地改造事業において、屋上緑化や公開空地、遊歩道計画など景観要素を取り込んだ質の高い計画を策定し、また、「阿倍野第 2 種市街地再開発事業」の推進にあたっては、計画案の景観面からの評価に取り組むなど、多大な功績を残された。阿倍野再開発事業については、退職後も昭和 59 年から平成 2 年にかけて、「阿倍野再開発地区道路環境整備委員会」委員長として、景観面からの道路環境整備に力を尽くされた。

さらに、幹線道路整備においては学識経験者として、景観要素を取り入れるなど、道路空間デザインを重視した計画策定にも貢献された。

大阪市内の大幹線道路である直轄国道 1・2 号線の整備においては、当時の建設省からの要請もあり、緑化やストリートファニーチャー、サインなどをふんだんに取り入れた、御堂筋と匹敵するシンボル道路とするべく、平成 8 年度、学識経験者の立場から「曽根崎通り整備検討委員会」の委員長として尽力された。現在、この区間は「曽根崎通り」として市民にも親しまれ、大変好評を得ている。

更に、国土交通省の第二京阪道路計画に際しては、平成元年から「緑立つ道」デザイン委員会の委員長として、「緑立つ道」の統一した道路景観を実現するための指針作りに貢献し、平成 3 年以降は「緑立つ道（第二京阪道路）」デザインアドバイザー会議委員長として、構想の実現に貢献した。また、京都第二外環状道路計画については、京都第二外環状道路景観検討委員会委員長として、高速道路景観計画の検討に携わられた。

最近では、大阪市の都市再生にも関わり、水都大阪再生においては、道頓堀川の人道橋や遊歩道のデザイン検討会の委員長、あるいはコンペ審査委員会委員長として指導・助言されるとともに、卸売り店舗が集積する船場地区の再生を議論する「都市再生船場地区協議会」の委員長として活躍されている。

これらの卓越した功績により、日本都市計画学会・功績賞を授与するものである。

三輪 雅久

三輪雅久氏は、昭和 25 年東京大学第二工学部建築学科卒業、昭和 27 年同大学院退学、昭和 27 年 5 月大阪府建築部勤務を経て、昭和 28 年 5 月大阪市立大学理工学部に助手として就任した。昭和 40 年 4 月教授となり都市計画講座を担当し、工学部の充実、発展に努めた。平成 2 年 3 月 31 日同大学を定年退職し、翌 4 月 1 日大阪市立大学名誉教授の称号を授与された。平成 2 年 4 月からは摂南大学教授に就任し、同大学における教育・研究に情熱を注いだ。平成 9 年 3 月同大学を退職するまでその発展に寄与した。

研究面においては、昭和 20 年代後半、都市の不燃化の基礎資料を得るため、戦後の宅地に細分化が進み統合されにくい状況を経年変化で見てゆく研究に当たった。次いで大阪市の市街地のひろがり方を、都市計画立案の判断資料として調査する研究に移った。都市地図の精度が高まり、誤りや重複が消える江戸中期以後の公刊地図にもとづいて、大阪市の市街地拡大の経過を、現地を踏まえながら、また拡大の主要因が工業であるか住居であるか公共交通であるか等の検討を加えながら、市街地発展図の研究を進めた。

次の研究主題は都市圏地域についてで、広域圏の計画制度が整わない時期にあって実質的な内容を伴った阪神広域計画の必要性和可能性を現実の大都市地域のうで求めた学術的研究を展開した。この一連の研究経過の中から工業関係地域の研究を学位論文『工業地区計画の研究』にとりまとめたが、これは 1960 年度・日本都市計画学会「石川賞（調査論文部門）」を受賞した。この学位論文という地区計画とは後の法定地区計画ではないが、工業地についても実質的な地区レベルの都市計画を充実していくことにつき学術上の提起をしたもので、この時期の先導的研究のひとつと評価することができる。

次の主題は、都市ごとのいわゆる「総合計画」づくりである。国の制度が確立する以前から研究対象を、個々の都市が持つべき現実の計画の中味をどのように総合的なものにしていくかに置いて、いくつかの府県市の自治体が自ら作業する内容を学術的にもどのように水準をあげるべきかの研究を進めた。この研究も一般論というよりも現実の個々の土地に即してどのような将来像を描いていくかを考察の基礎に置いている。これらの現場をふまえてのプランニングの一方で、学術的基盤を固めていくときに参考としたのはアメリカおよびドイツ都市計画の学術的手法であった。

これらの卓越した功績により、日本都市計画学会・功績賞を授与するものである。

国際交流賞受賞理由

萩島 哲

萩島哲氏は、九州大学工学部建築学科および人間環境学研究院において長年にわたって都市計画、都市設計、景観設計の教鞭をとっておられ、同分野における多くの人材を育ててこられた。土地利用変動をはじめとする解析・予測をはじめ、国際都市計画、アジアとの比較都市研究においての新境地を切り開くとともに、「新建築学シリーズ都市計画」「風景画と都市景観」「都市風景画を読む」「名所空間の発見」などを著しておられる。

具体的なご活動として第1には、日本都市計画学会の国際シンポジウムにおいて、大韓国土計画学会、台湾都市計画学会、中国城址規画学会等との国際交流の促進に貢献されたことがあげられる。発表者、コメンテータとしての活躍はもちろん、実行委員会委員として、特に1987年の大韓国土計画学会の九州への訪日団の受け入れについては九州在住の会員と協力して「地方のまちづくり」に関する情報交換と各県知事との交流会を実現され、また、1994年日・韓・台の学会を中心とした国際シンポジウムと関連行事の開催については準備会の幹事として、国際プログラム委員会委員として尽力され、また、国際シンポジウムでの論文のレフリー制度の確立に寄与された。1994-1998年には、日本都市計画学会国際交流委員会委員（韓国担当）をつとめられるなど、今日の都市計画学会の国際化に大きく貢献された。

第2には、日本都市計画学会九州支部で設置されたアジア都市研究会による国際シンポジウム **International Symposium on City Planning and Environmental management in Asian Countries** をこれまで5回にわたって主宰されていることがあげられる。本シンポジウムの定期開催により参加者相互の学術交流を活発にすることはもちろん、若手研究者の深夜に及ぶ人的交流が、今後の都市計画分野における国際交流に大きく貢献するものと期待される。

第3には、韓国・インドネシアなどの研究者と共同研究を長年推進されており、例えば日韓両国の地方都市の活性化政策に関する都市計画的比較分析、環境管理を考慮した工業地開発計画立案支援エキスパートシステムの途上国への適用、アジア都市研究センター設立のための総合的研究、コンパクトシティの居住環境システムに関する日韓都市比較等の一連の研究に対して、文部省科学研究費などの支援をうけ、都市計画に関する学術の振興に貢献しておられる点があげられる。

これらの卓越した国際交流への貢献により、日本都市計画学会・国際交流賞を授与するものである。

黄 世孟 (HUANG, SHYH-MENG)

中華民國都市計劃學會理事長 (1993-1995)、中華民國建築學會理事長 (1997-2000)、台灣大學土木工程研究所教授 (1995-2002) 高雄大學總務長 (2002-2005) を歴任ないし勤め、長年にわたり都市計画の教育、研究、実務に多大に貢献をされてきている。また、台湾において都市計画史を独力で開拓した先駆者です。都市計画から建築まで幅広く、日本と関係をもって活躍されています。

これらの卓越した国際交流への貢献により、日本都市計画学会・国際交流賞を授与するものである。